當家三益論略說

端　是　信

迹門に未だ正しく佛の顯本なし。玄義に『衆經ハ尙ホ不論ニ道樹之前、師ト之與弟近々ノ權實ヲ況ヤ遠々ヲヤ。今經ハ明ニス道樹之前ノ權實長遠ナルコヲ、補處數ニフルニ世界ニ不レ知、況ヤ其ノ塵數ヲヤ。(會本一上四一)』と。經に『佛智叵シ思議シ汝今出シテ信力ヲ住ニ於忍善ノ中ニ今皆當ベシレ得聞クコト』と。宗祖は『總テ御心得候ヘ與ニ爾前ニ法華經ト引向ケテ判ズルニ勝劣淺深ニ當分跨節ノ事有リ三ツ樣ニ。日蓮ガ法門ハ第三ノ法門也。世間ニ粗ク如レ夢ノ一二ヲ申ドモ第三不レ申候。第三法門ハ天台妙樂傳教モ粗ク示レスニ之ヲ未ダズ事畢ヘ所詮讓ニ與ヘ玉フ未法之今ニ也。五五百歲ヘ是也ニ六四八』と台家の教を本化の由漸として專ら第三跨節の本門、師弟遠近不遠近相に依り、本迹を判じて未法相應の教相を高揚し給ふ。台家四節三益の本門三益、殊に第一節に依り他の三を收め、『種熟脫の法門法華經の肝心也、三世十方の佛は必ず妙法蓮華經の五字を種として佛になり給へり一九』と宣ふ是全く本化の智眼より出たり。

經に『我本ト行ズ菩薩ノ道ヲ所レノ成セシ壽命』と是本因妙の依文なり。我祖『釋尊五百塵點劫ノ當ソカミ初證ニ得シテ此ノ妙法蓮華ヲ世々番々唱ヘ成瑠ヲ顯ニシ玉ヘリ能證所證ノ本理ヲ常體義ニ九九三』と本成已來この果上所顯の本法を佛種とし、之を下し、之を熟し之を脫するを本門三益となす。

取要鈔に『此土ノ我等衆生ハ五百塵點劫已來教主釋尊ノ愛子ナリ依不孝失于今雖不覺知一八〇』五三〇とは久遠本時の姿

婆以來衆生は本佛より妙法五字の化を蒙れるなり。只覺知せざるは不孝迷背の失による、故に壽量品を知らざる者を畜生等と言ふ七八九七九三本を知らざる脫は有名無實となる。かくて佛は元始已來、本の三身より迹の三身を起して非生現滅して衆生を度脫し給ふ九四二

台祖は第一第二教相立脚故爾前毒發等の得道を許す邊あり。我祖は第三に立ち、本門佛說なくんば補處なほ知らず斷呼爾前迹門の得道を許さず二八九九九七　九四二二九五　即ち壽量所談の本國土妙顯れざればなり。我祖約教の本迹判は、本門已顯の上は奪迹得道意在爾前なり。約宗の邊は台家像法過時の教を斥ふなり。

『以テ久遠ヲ爲シ下種ト、大通前四味迹門ヲ爲シ熟ト、至テ本門ニ令ムルヲ登ニ等妙ニ爲ス脫ト。本尊抄九四二』『壽量品ニ云ヘル、一切世間天人阿修羅ト者。爾前迹門兩教ノ二乘、三教ノ菩薩五時ノ圓人ヲ。皆云フ天人阿修羅ト二八七』又『爾前迹門大菩薩證得佛蓮華事本門時也。眞實斷惑聞壽量一品時也當體義九九七』又『壽量品ニ云ク、或ヘ失ヘル本心ヲ、或ヘ不ル失ヘ者アリ、乃至不ル失ヘ心ヲ者ヘ、見テ此良藥ノ色香俱ニ好キヲ即便服スルニ之ヲ、病盡ク除癒ヌ等云云。久遠下種大通詰緣乃至前四味迹門等ノ一切ノ菩薩。二乘人天等ノ於ニ本門ニ得道スル是也。本尊抄九四二』等と、久遠已來根熟の者壽量品に經て本種を知り本眷屬となるなり。故に『自ニ過去大通ノ法華經ニ乃至（中略）一代五十餘年ノ諸經。十方三世諸佛ノ微塵ノ經々（皆壽量ノ品序分也。自リ一品二半ノ外ヘ、名ク小乘教邪教ノ（中略）論スレヘ其機ヲ德薄垢重（中略）爾前迹門ノ圓教ヲ尙非ス佛因ニ、何ニ況ヤ大日經等ノ諸小乘經ヲヤ。（中略）設ヒ法ヘ稱スルモ甚深ノ未タ論セ種熟脫ヲ還テ同シニ灰斷ニ化ノ、無シトヘ始終ノ是也本尊抄九四二』とは種脫の義法華本門に局るなり。（七九二、又同ヒ）

壽量の開說にて久遠已來退本取退大取小の徒は咸く得脫し本門の大化既に終ると雖も、佛なほ滅後本未有善の衆生の爲に、最初下種の要法を留め本化に、付囑し給へり『以テ本門ヲ論スレヘ之ヲ一向ニ以テ末法之初ヲ爲ス正機ト。所謂一往見レヘ之ヲ時ヘ以テ久種ヲ爲シ下種ト、大通前四味迹門ヲ爲シ熟ト至テ本門ニ令ムルヲ登ニ等妙ニ爲レ脫ト。再往見レヘ之ヲ不レ似ニ迹門ニヘ。本門序正

流通俱ニ以テ末法之始ヲ爲ス詮ト。在世ノ本門ト、末法之初ハ一同ニ純圓也、但シ彼レハ脱此レハ種也。彼レハ一品二半此レハ題目ノ五字也（本尊抄九四二）』取要鈔一〇三九同致。『此本門ノ肝心ノ於テハ南無妙法蓮華經ノ五字ニ、佛猶文殊藥王等ニモ不レ付ニ囑シ玉ハ之ヲ一。何ニ況ヤ其已下ヲヤ、但召ノ地涌千界ヲ、說テ八品ヲ付ニ囑シ玉ヲ之ヲ一（九四〇）。所詮迹化他方ノ大菩薩等ニ、以テ我內證ノ壽量品ヲ不レ可ニ授與一ス。末法ノ初ハ、謗法ノ國ニノ惡機ナル故ニ止レ之ヲ。召ニ地涌千界ヲ一、壽量品ノ肝心タル以テ妙法蓮華經ノ五字ヲ令メ玉フレ授ニ與閻浮ノ衆生ニ、（九九二）。壽量ノ法門ハ爲ニ滅後ノ一請シ之ヲ也（九四四）。是ノ好キ良藥ヲ今留テ在オク此ニ汝可シ取テ服ス勿レ憂フルコト不レ差ニ。作シ是ノ敎ヲ已テ復至ニ于他國ニ一遣レ使ヲ還ヲ告ク等云云分別功德品ニ云ク惡世末法ノ時等云云。本門ノ四依ハ地涌千界ハ末法ノ始ニ必ス可シ出現一ス、今ノ遣使還告ハ地涌也是好良藥ト壽量品肝要タル妙體宗用敎ノ南無妙法蓮華經是也（九四四）』等と、かくて本門三益は久遠より在世に終るに非ずして三益三世に恒に普きなり。（玄義會本上一上二十九）参照。以上を在世の三益となす。

又在滅三時に就いて三益を大判せば、在世は脱、正像には在世下種の機、小權等の四依に將護せられて熟脱を得（九四一）、末法に至つては在世已種の機盡きたれば本未有善の機に直ちに本門の敎を說き下種の大益を施すべきなり。

例せば過去不輕の强毒下種の如し。三時を脱熟種と配しここに末法下種の論起るなり。

正像を熟益末法を下種と定むと雖も仔細に判ぜば三時共に三益あるべきなり。『並脱並熟並種、番々不レ息、大威猛、三世ニ益ス物ヲ。釋ノ云『字々句々會々味々世々念々常ニ爲ニ衆生ノ一作ニ一佛乘ノ種熟脱ヲ。（玄義會本一上三九）』（起一三八）と苟も機類だにあらば恒に三益廢すべからず。

今末法の機は一同に逆謗（一〇四三）のみありと雖も本化開敎已後は自ら信不信の二機あり。故に得益又下種のみに局らんや。況や一經種熟脱の義あるをや。宿善信順には熟脱を論ずべく、聞て逆く者は下種、故に一の題目種となり熟となり脱となるニ〇なり。

未法下種の相を示して『今未法ノ初以テ小ヲ打チ大ヲ以テ權ヲ破シ實ヲ、東西共ニ失シ之ヲ、天地顚倒セリ。迹化ノ四依ハ、隱レテ不ニ現前セ、諸天棄テ其國ヲ、不レ守ニ護セ之ヲ、是時地涌ノ菩薩、始テ出ニ現シ世ニ但以テ妙法蓮華經五字ヲ令レ服セ幼稚ニ、因謗墮惡必由得益ト（本尊抄九四七）』（四四一、一〇九七、同教一一二五）。この下種の後に順逆二機始めてあるなり（取要抄一〇四二）』

像末の熟益に就き、像末は時を異にし、衆生心田に肥脊あるを以て、台祖は權實雙用したれども未法は劫濁甚しく宿善又薄ければ所投の教至深の要法を用ひ、妙法受持唱題せしめて我祖は單令用せられたり。

此單令双用は弘教の方軌にして時と機と國及び能弘の導師に依て自ら用捨あり。累品の『若シ有テ衆生ニ不ニ信受セ者ニハ當ニ下於テ如來ノ餘ノ深法ノ中ニ示教利喜ス上』、方便品『更ニ以テ異ノ方便ヲ助ケ顯メ第一義ヲ』とは台祖之に依る。安樂行品に『有レ所ニ難問ニ不レ下以テ小乘ヲ法ヲ答ヘ上。但以テ大乘ヲ而爲ニ解說ス、令レ得ニ一切種智ヲ』と是單令用實の佛旨（一〇〇二二六）なり。此二軌を時に約せば記（九ホ九）に『簡ニ佛世ハ當機ノ故ニ、末代ハ令ム聞カ結緣ノ故ニ（三四五）』と、是在滅大判なれども、滅後正像は本已有善故に双用、本未有善の未法は單令なり。已種の機は双用、未種の機は單令。兼雜國は双用、唯大國は但實なり。導師は鑑機の力なき凡師は單實、聖師は機を誤らざれば双單用捨自在なり。又文句四に『如來ハ悲故發遣シ、喜根ハ以レ慈故强說ス』とは慈と悲の異あり（三四四）。我祖は時と機に鑑みたる慈の導師なり。但し玄義（七上十二）に『善弘經者、用與適レ時。口雖レ說レ權、而內心ハ不レ違ハ實法ニ』同（九上廿五）籤文に『今一家弘レ法、大小通メ立ツ、以レ小助レ大、或開ニ小即大ニ、或破レ小明レ大、或以レ小形レ大、則是半滿双ベ弘ム、觀教俱ニ立ス』と是双用の眞意なり、雜亂と濫すべからず。但し我祖の下種論に攝折ある又此處より出づ『一切ノ經論此二ヲ出デズ（如說修行九七〇）』（九七五、四四四）と。而して逆化折伏、强毒下種は悉壇法門の精妙至極のもなり。

當家の五綱の中の諸教相は是未法流通の教體を詮するにあり。その所詮は、本尊鈔本法三段の一品二半にして、要

は題目の五字なり。今それを述ぶるに二となす。始めに熟脱相對に又二。在世を言はゞ脱益の法體を勝るとして本尊鈔に一品二半よりの外は小邪末覆、その機は德薄垢重等と言ふ九四二』。次に滅後を論ぜは正像所弘の小權迹の法を以て末法今時の本門法華の序分とし一五六〇、その機は自ら在世前四味及び帶權の圓人の如しとす一〇六八、是正像を熟化とす。末法の教體は所謂內證壽量正說の法體にして事行の題目と本門本尊となし、其機本門直達の人六八、信順受持一行を以て脱る得る故に、末法の題目本尊は大乘正見等の教にして、其機は薄德等に非ず。二六三、九九一、九三九、御義上三〇、向記上ノ三六、此序正熟脱相對の文は在世の機教に約せども、意は末法の事觀を立つるにあり、本迹判の綱格又ここにあり。

次に種脱相對せば下種の要法は肝要五字、脱益の要品は一品二半なり。是に又二。始めに在滅相對せば『在世ノ本門ト末法之初ハ一同ニ純圓也、但シ彼レハ脱此レハ種、彼レハ一品二半此レハ題目ノ五字也本尊抄九四二』とは在末法體同、然も時機異なれば施教異なるを示す。故に吾祖正宗脱益の要品に簡び、別して流通下種の要法を取る一〇九八。次に再往末法に種脱の二益あるなり。今時に順逆の二機あり四二〇、順緣は宿善あるによる二六三御義上三五、故に順機には三秘事觀の要路を示す、是所內證壽量品なり。妙法不信背迷の輩には肝要の五字を强毒し未來當成の大緣を結ばしむ。なほ本法三段流通分に就いて、人を指せば本法の活現たる本化聖祖たるべく、本化所弘の法體を五字と言ふべく、又流通分はなくとも正宗を流通するは導師の任なり。綱要師は流通外には五字、內には用の二十八品を含むと言ふ其義あるべし。九四二九四三

かくて我祖末法の對機は今番下種に預らざる久遠失心の違順の二機にして、本因妙の導首は日蓮聖人なるも化源は久遠本佛にあり。三益の法體は妙法五字。行法は信順受持、位は名字位中の六即、教彌高位彌下とは是なり。易行易修、誰かこの恩寵の慈教を遮機せざらんや。